

お知らせ：12月24日 午後5時 イグナチス教会 四谷駅前

社会学の理解の仕方

1. 社会に対しての法則的理解 (代表：Émile Durkheim ← Mary Douglas が批判)
2. システム的理解 (代表：Talcott Parsons(機能主義))
3. 葛藤理論 (支配/被支配)
4. ethnomethodology ← 新しい社会理論の形か、あるいは社会理論の終焉を意味しているのか
※法則的理解：因果関係をたてる ⇔ システム的理解：因果関係をたてない

学生のレポート：Durkheim の唱える理論の例外を見つけられない

⇒ J. Maxwell Atkinson：私が答えます!!

Douglas：死の具体に関心 (一つ一つの死に近寄る)

Atkinson：coroner が何をしているのかに関心 (どのように死因が判断されるのか：自殺のてがかり)

Atkinson, John Maxwell. *Discovering suicide: Studies in the social organization of sudden death*. University of Pittsburgh Press, 1978.

Atkinson：自殺は、生きている者によるその死の分類 (categorization) に着目すべきものである

“Suicide can therefore be seen as an interpretation placed on an event, an interpretation which stems from a set of taken-for-granted assumption. This view has serious implications for research which treats official statistics on suicide as ‘facts’...”

[[たとえ話]]

⇒ 「ねずみ」と「みねず」がいて、みねずは泳ぐという特徴をもっている

⇒ 研究者はみねずを研究した

⇒ その研究から分かったことはみねずは泳ぐということであった。

観察されるべき観察者

「a という性質をもつものを自殺としているにもかかわらず、自殺を研究して得られた結果が自殺は

a という性質をもつということが判明した」というような状態が起きている。

観察されるべき観察者に観察される者

普段、人間の選択肢は限られている (例えば、ビルから落ちるなどは選択肢から排除されている)

⇒ しかし、自殺を考える人はこのような通常ではもたない選択肢をもつようになる

⇒ 自殺する人間も、この”taken-for-granted assumption”にとらわれている。

ethnomethodology まとめ

観察される人間 (自殺する/した人) のみならず、観察する人間 (学者/研究者) も社会の中に存在している

⇒ 「両者観察される者である」という状況が存在している

⇒ 社会学理論の「終わり」なのか「始まり」なのか